

一人一人の学びから

校長 山田 浩之

六月二十二日、日本生活科・総合的学習教育学会主催の研究大会が、新潟小学校で行われました。二年生の生活科と四年生、六年生の総合的な学習の公開授業に全国各地から約三百人の教員が集まり、授業を参観し、その後の協議に参加しました。

二年生は、地域にある施設や物、人、事柄を取り上げ、自分にとっての町の一番の自慢を選ぶ活動に取り組みました。例えば、西大畑公園やセーフトテイスタッフの皆さんなどを自慢として挙げました。一番を選んだ理由を発表していく中で、自慢に対する自分の思いを振り返りました。子ども一人一人が自分の自慢を選択し、一番の自慢を考えていく活動が中心ですが、その過程で、友達の理由を聞きます。友達の見方を得ることにより、選んだ自慢に対する自分の思いの強さを確かめたり、町への思いを深めたりしました。

四年生は、地元のお菓子屋さんのどら焼きのおいしさの秘密を探る学習でした。最初は、一人一人が試食で感じたことを話していました。その上で、お菓子屋さんが以前くださったっていた手紙を思い出し、秘密について書かれているのではないかと、手紙を読み直しました。そして、手紙から、お菓子屋さんの努力や思いを改めて理解することができました。最初の試食は、消費者としての見方でしたが、後に生産者としての見方を得ることができ

ました。

六年生は、県外客を古町に呼び込むために古町PR動画を作成する活動を進めています。山形県で地域活性化を推進している方をゲストティーチャーとして招き、自分たちで作った動画を見てもらいました。現時点では、動画に県外客を呼び込むだけの力はないという評価でした。動画を改善したいと願った子どもたちは、ゲストティーチャーからいただいた手本の動画と自分たちの動画を比較しました。そこから見えてきたのは、古町のファンを作る重要性でした。一度きりの来訪ではなく、多くの人が古町のファンとなり、関わり続けてくれるような動画にすることが自分たちにできることだと見方が変わりました。

どの学年も、まずは、一人一人やグループでの取り組み、そこから生まれる経験や考え方、思いを大切にしています。そこには、個性や多様性が保障され、子どもの興味や意欲が生かされています。その上で、友達との交流や他者からの働き掛けにより、新たな見方に気付いていきました。個の学びが十分に保障された後だから、自分と他者との違いに気付き、他者の良さを受け入れられました。自らと他者との違いを理解し、認め合う経験も大切な学びの一つと考えています。